

こころを一つに

スクールカウンセラー便り
2020年7月

3月の突然の休校から、緊急事態宣言が出されてさらに休校が長引いて、ようやく学校が再開されて1ヶ月あまり。再び感染拡大の兆しが出てきました。身近に感染者が出てくる可能性も高まってきた今、偏見や差別について少し書きたいと思います。

報道等でも感染者の行動が詳しく報じられて批判にさらされることもあります。感染者や感染しそうな地域・職業・人への偏見や差別は断じて許されるものではありません。人権上許されないということの他に、これらの偏見・差別は、自分自身のためにもならないのです。

残念ながら未だに世界中にはあらゆる差別があります。この差別は、実は私たちの不安がおこしているものなのです。

特に、新型コロナウイルスの感染拡大防止の局面では、誰しも感染の危険性があります。人は誰でも自分を安全な状態に保っておきたい。これは生物として大切な本能であり、これがあるからこそ感染しないよう気をつけて対策を取ることもできます。

しかし、敵は何しろ目には見えないウイルス。見えない敵を攻撃することは難しいので、目に見える人や場所、職業を“敵”と見なして、攻撃し排除しようとしします。「あの人は～～をしたから」「あそこは危険」「〇〇の職業の人には近寄らないでおこう」等々。そうすることによって「自分がいる場所は安全だ」「自分は感染した人とは違う」と思い込みたいのです。

この行動により、人は一時的な安定を手に入れることができます。しかし、人種や性別・出自による違いは決して自分がその位置になることがないので、恐ろしいことに「安心して」差別することができますが、感染症は、誰がなってもおかしくないもので、いつ自分が「差別する側」から「差別される側」に陥るかわかりません。なので、一時的に安心できてもすぐ不安が巻き起こり、人によってはさらに差別をエスカレートさせることで不安を取り除こうとしてしまうのです。

こういった偏見・いじめ・差別は、医療従事者や配達やスーパーのレジ係の人など、最前線で戦っている人たちや生活に欠かせない仕事に就いている人たちを孤立させ、そういった職種の人たちが一生懸命働いて社会を回していくことを妨害します。また「感染したかも・・・」という人が言い出しにくくなって体調不良を隠して普段通りの生活をしてしまうことにつながります。

つまり、差別は感染拡大を助長してしまうのです。

どうか、最前線で戦っている人たち、生活に欠かせない仕事に従事している人たちに、そして感染してしまった人やその周辺の人たちに、暖かいまなざしを向けてください。ソーシャル・ディスタンスを保って、気持ちの上でハグしてください。それが私たち自身を守ります。

(スクールカウンセラー：春原千夏)

